

「ハードボイルド」と呼ばれるものがある。暴力的・反道徳的な内容を批判を加えず、客観的で簡潔な描写で記述する手法・文体をいう。一般的には、サスペンスやスパイもの、ギャングものが多い。

ハードボイルド小説を書く作家として思いつくのは、大藪春彦、片岡義男、大沢在昌そして北方謙三だろうか。北方さんは、ハードボイルド小説界の巨匠でありながら、『三国志』『水滸伝』等歴史大作も手がけるなど多方面で活躍している。

多くの作家がそうであるように、北方さんの作家としてのスタートは順調ではなかった。20代の10年間は、肉体労働をしながら、ひたすら小説を書き続けていた。その間のボツ原稿がどのくらいあるか。400字詰めの原稿用紙を積み上げると背丈を越えるくらいである。北方さんは言っている。

あの10年間は、いったい何だったのかとよく考えるんです。それは青春だったと思います。青春というは意味のあることを成し遂げることじゃないんです。どれだけ馬鹿になれたか。どれだけ純粋で一途になれたか。

それがあの背丈を越えるボツ原稿だとしたら、捨てたもんじゃないと思いますね。青春時代にすべてを完成させようと思っていると、チマチマと小さくまとまった生き方になってしまうだろうと思うんです。けれども私は10年間馬鹿になって突っ走った。転がっては突っ走り、転がっては突っ走り、その集積が背丈を越えるボツ原稿の山。これはなかなかのものだと思うんですよ。やっている最中はとんでもなかったんですけど。

でも途中で書くのをやめようとは、不思議と思わなかったんです。きっと私は小説の神様から小説を書けと言われてこの世に生を受けたんだと信じるしかないんですね。周りからは何度もやめろと言われましたよ。

この前、福島民友新聞「隨想」の原稿に「若いときに流さなかった汗は、老いてから涙となる」という一節を入れた。そのためだろうか。北方さんの話が妙に心に沁みた。

北方さんの人生とは、とてもとても比べものにはならないが、我が人生を振り返ってみる。何もわかっていないのだが、とにかく前に進んでいた、進むしかなかった時期がある。ひたすらもがいていた。何とかしようとしていた。光を見たかった。前に進めば出口があると思っていた。そんなことが、10年続いた。

結局、出口は見つからなかった。だが、わずかではあるが光は差してきた。今思うと必要な10年だった。あの10年が、その後の自分を支えてくれているのは事実である。長い人生の中では、同じ10年でも、その感じ方、やるべきこと、できることが違ってくる。若いときの10年ほど、大切なものはない。後の人生が充実してくればくるほど、あの10年が輝いてくる。